

続経営エートス覚書

——体感フランスと日本——

児 嶋 正 男

1. はじめに
2. 共和と大和
3. システムとパック
4. おわりに

1. はじめに

日本の国を外にしてはじめて、われわれ日本人はどうしてこうもせっかちなのであらうかと、つくづく考えさせられた。せかせかと道を歩き、横断歩道を小走りに渡っているのは大抵日本人であり、両替や買物などで一寸手間どるとすぐイライラしているのは日本人だけのようである。ラントマン，ラントマン（ゆっくり，ゆっくり）と事を運ぶことが，われわれには至って苦手になっている。

われわれはずっと前からこんな風にせっかちであつたのであらうか。もとはもっと悠々と暮していたのではないか。貧乏ながらも楽天的に生活を楽しむ術をきわめて上手に発達させていたのは外ならぬわれわれ日本人ではなかったか。たしかに今でも所によっては悠々と働き暮しすることをしている。

わが住む町では，朝の10時と3時には，お茶の時間をゆっくりととって話をはずませている。始めてそれをみたとき，このような日本的ゆっくりずむが未だに存在するとは，と，明治のベルツ先生の驚きなど思い出しながら，これこ

それは後進南方的遺制であるときめつけたりしたものである。ところが最近では、むしろ今日のせかせかしたわれわれの在り方の方がおかしいのではないかと思うようになった。いうなれば伝統社会における自給自律的生活形態と、産業化が進んでの機械制大工業、画一大量生産に歩調を併せての他給他律的生活形態とは当然に異なるのであり、伝統的形態が別に後れているというばかりではなく、むしろ伝承すべき対抗形態があまりにももろく急速に崩れ去ってしまったことを不思議としなければならないのではないかと。

とにかく、今の世の中は忙しい。物心つくやうと、友達や家庭と離れたところでの「勉強」に追いまくられ、親も先生もそれに精力を注ぐことを専らにし、しかも悔多くその弊害をなげくことしきりなのである。幼年には幼年の生活があり、少年には少年の暮しがある。

勿論そこではこれからの人生への準備もなされねばなるまい。しかし準備はそのときどきの生活のなかに自然に遂げられる。今、われわれのもつ忙しさの主因は、この準備を専らにして、本来の主体の在り方を失っていることにある。本末を転倒することにより徒勞し、自分自身の人生を失っていることに気付くことなくいる。

「勉強」の末にその地位を得たと思われる、「エリート」中の「エリート」をみるがよい。彼等はわれわれに生きる權威を何一つ示すことなく、権力に溺れて利権に汚れ果てている。この様な人間行動の存在を許し、このような行動しかし得ない人間をしきりに作り出す機構は変えられねばならない。

だが、権力にあこがれ、利権を手に入れることを可能にする立身出世への願いは、今やいよいよ大きい庶民大衆の夢であり、それを私した者に対する畏敬は止み難い。自らを権力の地位に置くことの及びもない者は、権力者をおのれの頭に戴くことによって、おこぼれを頂戴することに心を砕く。権力に組みすることによって身自らを収奪し、その災いを広く民衆全般に及ぼしていることにはなかなか気づかない。

人びとは人びとにならっておくれをとることなく、今日も同じようにわっと事を行い、同じ所にどっと繰り出すことをつづけている。この力が今日の日本

の経済成長をもたらし、経済成長は民衆がこのように行動するよう、その力を付与した。

あくせくと働き通しに働いた結果、今日の日本が、高度の生産力をもつに至っていることは疑いもない。鉄鋼、自動車、造船、電機、石油、化学、繊維、これらの産業のどれをとってみても世界に冠たる威容を誇っている。だが、それに比べると住宅、教育、社会保障など、いずれも甚だ心もとない。これほどに発達した資本主義国において、これほどに劣悪なままに生活基盤が放置されている国はあるまい。

高い生産力の甚だしく不均衡な行使、それは一体どこから出てくるのであろうか。消費に然るべく完結しない生産は、生産に問題があると共に消費者民衆の力量、行動にも問題がある。消費は民衆の生活の中に完結する。既にしてわれわれの生活する社会は民主々義社会であると標榜されている。民主々義（デモクラシー）とは民衆（デモス）が権力（クラトス）を持つ社会である。民衆は消費を自らのものとし、生産をそのためのものにする権力を既にもっているとされているのである。

ところでこの権力というもの、ある日突然に空中に開花するというようなものではあるまい。それが人間によってあるものである以上、その源泉はわれわれの身の内に、われわれの日々の暮らしのなかにあること明らかである。われわれはこの権力がわれわれから出てわれわれを支配する機構を形造る過程の前に茫漠と形をなさないままにその源をなしている、われわれ自身の生活の習俗をいま暫く管見してみることにしよう。

1. 共和と大和

大太平洋戦争に敗れての日本民主化過程において最も大きい方向づけをしたものは、憲法改正であった。そこでわれわれの国は、大日本帝国から民主日本国へと生れ変わったことをはっきりと認識した。ところで、この日本国よくよく考えてみると、立憲君主国であるのか共和国であるのかまことに定かでない。主

権在民ということであるから、もはや帝国ではないということであるが、それなら共和国かと聞くと、そうでもないという。では何国かと言うと、日本国だという。何だかはっきりしないが、それ以上に問い匡すことをしないで、われわれは日本国に落着いている。われわれは、大は国家という機構から始まって小はグループに至るまで、自分がその中に生まれ込んだ仲間としていることに何の疑いも持たず、国家や自治体や企業が、人びとのための手段であることを、あからさまに言われると、理屈ではその通りであるとしながらも、素直にそうだとは認めにくい。特に国家などという表現は、日本に独特の言いまわしで、そこには先祖代々住みついだ麗わしの山河、祖国という感情から、親兄弟・家族、一諸に働き暮している人びととすべてに切り離せない情緒的なものが総括されている。これはひよっとすると *état* とか *state* とかいう言葉にその国の人びとがもっている語感とは大いに異なっているのかも知れない。われわれは、自分とは異なる他人とともにグループを形成し、ネーションを造り、さらにそのグループやネーションのために自治体や国家を構えたとは、なかなか思いつけないのである。国家や自治体、さらには企業が人びとの手によって造りなされたものであることはその通りであり、人びとなくして国家も自治体も企業もあり得ないことは自明の理であるが、われわれは歴史の実感として、国家や自治体を、また企業すら、民衆自らの手によってわがためにする手段として造りなしたとする感は甚だうすい。ずっと昔からあった拠所が、変化をしながら伝承され、今日に至っているので、そこにそれぞれの自分の意思が参入した手段とはとても思えないし、また日常の暮らしの中での自己の意思表示をそこにすることには甚だ欠けている。われわれの多くは、こと改めてその様に自己を主張しなくても、大体考えることは似たようなもので、以心伝心、何となく互い的心思は伝わり合っていると思ってしまう。いちいち意見を述べたてるような水くさいことをしなくても、その掌にあるものが、そのことを十分に斟酌してくれることを以て足れりとする。

実のところ、髪の毛の色さまざまにちがう、異人たちが考えだした“共和”ということ、民主ということと並んで、それと共存していることのようなのである

が、われわれにはどうもはっきりとわからない。専制に対する共和、君主に対する民主などと、言い聞かせられてみたとして、日常の行動のなかにはちっとも身内のなかに生きては来ない。

共和という発想をもち、共和国をはじめて作った毛唐の国フランスは、みるからに異人の集まりとみえる。彼等はフランス国のフランス人ではあろうが、それぞれに、髪の色がちがい、目の色がちがう。人の特長をあげる場合は髪の色、目の色をあげ、その後姿形をいう。われわれの髪の色はちがうといっても知れているが、フランス人が10人集まれば正しく十人十色をなす。大陸の真只中において人びとの往来はげしく、流動しきりなる所では、日本のように斉一の均質人間が作りあげられることにはなかなかならないのであろう。

このようにみるからに多様で、さまざまに異なる人間たちが、やはり生き栄えてゆくためには、共同の行動をとらざるを得ず、そのためには、それなりの努力と工夫が重ねられ、然るべき仕組みがつくられてきたにちがいない。

頭から人を信用してかかったり、自分がそうだから他人もそうにちがいないなどと思い込んでしまったりは決してしないフランス人の生きざまは、物事のけじめのつけ方が日本人とは多分に異なっている。

もともと、このうましフランスの国に方々からやって来て住みついた人びと、今日の豊かさを築き上げるまでには、奪い、奪われ、殺し殺されなど、並大抵ではない辛苦の歴史を経たのである。自分なりの生き方を貫いて、それぞれに歴史を創ってきた、そういう自負を持っているのか、人びとは個々めいめいの生き方を少々のことでは曲げるものではない。未だに俺はフランス人ではないとするフランス人もいるし、政府の施策をたのみにしては俺たちの利益は守れないとなると、鉄砲を持ち出して、村人こぞって実力行使に訴えるなど堂々とやってのけたりもする。

文化の国フランスといっても、金持も居れば、貧乏人もいる。紳士、淑女もいれば、かっ拂いも乞食もいる。言葉もろくにしゃべれない日本人などとみれば、にこにこお愛想笑いはしていても、こいつをだましあげて一稼ぎしてやろうと思っている者もざらにいる。

大体日本人は、買物をして釣銭を目の前で数えてみるなどということはしない。そんな風に相手を信用しないような所作をすることは気が引けてできないし、また、釣銭をごまかそうなどと、さもない魂胆をもつものもないから、それで間違いは滅多に起らない。だが、フランスでは、買物をして釣銭など頓着しないようなそぶりをみせれば、ごまかしてやろうという奴がうようよいする。

そして曰く、日本人は金を勘定しない。彼等はきっと、数を数えることを知らないんだ、と。こういうわけだから、日本に来たフランス人が買物をしたり、タクシーに乗ったりして、釣銭をごまかす者がいないことに感心したりする。

とも角もフランスでは、物事はきちきちチェックすることになっている。それをうっかりすると、だまされてひどい目に会う。というわけで、法令書式行為が物事を処するためには欠かせぬ役割をすることになる。サインをするときには、もしかすると貴方の首をとる、と書いてあるかも知れないのだから、よくよく確かめてすることです、とは在仏日本人ビジネスマンへの歴代の申し送り事項であるという。私も、アパートを借りることで、親切そうにみえる小母さん方にコロリとしてやられたにがい思いは未だに忘れ難い。とも角、油断をすればだまされる。

人は隙あればつけ込み、油断をすればだまそうとする、それが人なのだとすれば、人びと互いにうまく暮してゆくためには、何処かに互いの意思がまともに通じ合い、信じ合えるところがなくてはならない。その通路が、契約であり、約束である。契約し、そこに己れの氏名を記した場合には、まさに己れの死命を賭けねばなるまいし、約束を反古にすることは、たった一つの自分の真実を放棄することになって、社会には容れられぬことになるのではないかと感得される。

こうして、異質なるものが、互いに自己を主張して、ざんぎゃく殺戮、抗争を繰り返したあげく、敵対し対立する相手の立場をも認めようという、対立のなかでの共存が生れ、相互に合意したことだけは守り抜こうという契約のルールも生じたのであろう。また、強者と弱者については、もともと強者は強者の連帯のなかにその力の支えを一層に強く持った。王は諸侯の連帯に支えられ、

諸侯は家臣たちに支えられて。階級の連帯、相互交流の最もさかんに行われるのは上流の階級においてである。ヨーロッパの王家や諸侯の婚姻が如何に行われてきたかだけをみてもそのことは明らかである。

弱者の強者に対する対抗が、弱者の多数の連帯によって一団となって行動することにあることは、強者の連帯に学ぶべくもなく、既にして彼等の共同体としての暮らしの中に体得している。農業から商工業への職業が分化すれば、そこにはまた強い同業者、同職者の連盟を作って、団結した団体の力で自分たちの利益を守って行こうとする在り方が必然的にとられてゆく。自分たちに独自に有利に事を運ぼうとすれば、対立する集団のなかで、自分たちもまた対抗力ある独自の集団でなければならない。

自分たちに重大な利害のあることは、身分や階級、利害対立を前提にして、そこでそれぞれの立場に基く権利を主張し合い合意を求めるための会議が開かれることを要件とする。このことは典型的には、かつての三部会にわれわれは教えられるのであったが、三部会がその名の通り身分議会であり、会議がこのように身分、階級を代表する者によって構成される在り方の継承は今日においても変ってはいない。特にそれは、日常の生産の場である企業において、企業委員会や労働者代表制など、われわれとは異なる構想による決定に対するチェックシステムの設定をみることとなる。

一般にパトロンの権限はきわめて強く、身分違いの従業員が個々にその決定に介入するなどは至難のことであるが、そこでも労働条件に関わるような従業員の直接の利害関係については、つねに企業を越えた横断的連帯による力の対抗を拠り所にしての規制が形成される。パトロンの権限行使は、横断的対抗によりチェックされて生じた申し合わせや法令のもとで、自由な裁量を行使することになる。権力の恣意的、一方的行使を大枠で把えて阻止する、横組みの機構が歴史とともに強化され、精緻化されつづけているのである。

フランスの人びとが先づは横断的大分割により階級や身分を分かち、さらに細分割して個人となり、その住民5千万人がそれぞれ自分は他の人とは異うのだということを主張し合うことによって、均衡を保ち、共和を形成しようとし

ているのに対し、われわれは一億一心、自分と他人が似たような生き方をすることを善としている。われわれは自分の国の名を“やまと”と稱する如く、人びと隔りなく相和して暮す“大和”はわれわれの生き方の基本原理である。隣と似たようなことをし、皆が思っているように思い行動すること、それが幸せな暮らしをする第一要件である。

他人と、他所と同じようにする、などということは骨の髄から反対だとする意固地で意地っばりな人はどういうわけか日本にはみられない。似たようなことをしていないと気がひける人たちばかりである。そういうわけか、北から南までちょっとした町には何々銀座があったり、すぐれて固有の美しさを持つ品格高き自分の町を、わざわざ日本のハワイなどといってみる。とにも角にも、一つのモデルがでてくると、皆がそれを追いかける。それに倣っておけば無難であり、それが自分を生かす方法であり、自分が他人から仲間外れにならない道である。

人とはちがった自分の意見を述べ立てることは、仲間うちで事をおこし、互いにやっつけたり、やっつけられたりすることになりかねない。自分の主張が、皆と異っていると、皆にいやな思いをさせるだけでなく、忽ち我が身を仲間外れにおくことになる。外に出ては何よりも口をつつしむことが肝心で、物事をあげつらわぬこと、「議をいわぬ」ことは世に出る者の第一に心掛くべき必須事である。

謙虚に従順に、上長の意向を扱んで長所を学び取ってゆくことは、確かに自己を成長させる最良の方法である。だがわれわれは、「口は禍のもと」「出すぎた杭は打たれる」、と、何時しかに個を殺しながら、そこにささやかな安息の利を求める思いや行動の型の中に深く自己を打ち込んでしまっている。われわれは仲間うちの寄り合いでは、まことにかしましく、よく無駄話をする。だが公式の場で自分の意見を述べることには甚だ不得意である。殊に権力には弱い。

広く会議を起こすことが謂われ、戦後の民主化のなかで、会議は日本にもっともよく行われる行事になっている。日本の会社では、会議、会談なしに仕事を進めることはできない。ビジネスが電話や文書によっては事足りず、会議や

会談なしには進捗せねことは、日本人の忙しさの最大の原因である。われわれは会議好きであり会議で大いに暇をつぶしているのである。公式の場での発言嫌い、自己主張嫌いのわれわれは、それと矛盾して会議に、また会談に、大いに浮身をやつしているというわけである。

ところで、会議となれば互いに異なる意見を述べ合って、恣意的独断や偏見を排することを目的にして行われていること当然である。しかしわれわれが行っている会議の概ねは、多くの意見を闘わせ、新たな合意の構想を得ることにはなかなか成りにくい。われわれが行っている会議というのは、既にして同質人間の集まりとしての意見の集約を目指していることが多く、われわれはまず、自分はそのことについてどう思うかということより、その事を他の人たちはどう考えているのだらうかと推測することに忙がしい。

そして、大体他の人たちはこう思っているだろうということがつかめると、皆と余り差のないところに自分の意見があることを表明する。自分がどう思うかというよりは、他人がどう思っているか、他人に自分がどう思われているかという事に気をつかうことの方が大きい。だから、大多数の人がそう思っているらしいということが判明すると、もはや、殊更に異にする意見は口にされなくなり、大多数の人びとに少数は同調し、余程のことがなければ、会議は全員一致の形で決論に至る。

われわれの会議は、もともと同質の人間の寄り合いであって、会議を開くことの意義そのものが、上位者の意向に下位者全員の賛同を得ることにあることが多い。その目的は、会議という過程を経ることによって、反対の意向のある下位者に然るべき配慮がなされることを理解させ、何時しかに反対意見が消滅し、全員の賛成によって成立した決定とすることにある。大切なのは、会議が開かれることであり、そこに会議のメンバーとして出席することである。議事のきまり方よりも、それに参加する尊重されたメンバーであることを、自他共に確認することが大きい。

多くの人びとを会議へ参加さすことによって、参加者に縦断的連帯を生じ、「俺は知らない、聴いていない。」という、非協力的傍観的態度は完全に排除さ

れ、全員の協力態勢をつくり上げることができる。

日本人の行動特徴の一つとして、たてまえと本音ということがいわれる。このたてまえとは異った本音が別にあるとされるのは、われわれは面と向って相手の考えに反対したり、違う意見を述べ立てて相手にいやな思いをさせることを好まないことから生じる。当面している相手に然るべく同調対応しているのも本音であり、それとは異なる意見を持つ他の人に当面するとき、また同調することもやはり本音である。というのは、われわれはもともと自分がどうしても固執しなければならない本音というものを持っていないのである。¹⁾ 互いに等質なものを見出しての同化、より強力なものへの順化は、われわれの生活の安定拡大を図る伝来の方式であったのである。

われわれの多くは、人と語るとき相互に相手を対等の立場において語り得ることが甚だ少いことを知っている。会議、ことに企業における会議や面談は、このような状況下において開かれている。そこでは仕事そのものについての検討が微細に行われ、喧々囂々の議論が行われるよりは、同化と順化による人と人との堅いつながりができることにより、何よりも堅固な縦断的連結環を構成し、参加者が依拠して外れることのない「たてまえ＝本音」が注入されることになる。

異なる意見、ちがった発想を以て互いに対立しぶつかり合い、誤りが改められ行き過ぎが是正され、それぞれに啓発されながら新たな構想による合意が生じる、ということ、討論の理想としては誰しも知っている。だが実際には、意見が対立すると、意見そのものに対して冷静な吟味が行われるよりも、その意見を主張する人と人との対立になって会議はしらけてしまう。会議でわからない点を質問したり、ごく僅かの意見を述べようとするにも、われわれの会議はいろいろの配慮とかなりの勇気が要る。会議はしばしば一方的な発言者と寡黙な拝聴者との対峙ということにもなる。

考えてみると、われわれは、小学校から大学まで受けて来た教育のなかでも、

1) 藤田省三『原初的条件』未来社1975、23ページ。

日常の生活のなかでも、質問をしたり、討論をしたりする経験は乏しく、そういう訓練はちっとも受けていないのである。学校でも会社でも、問題を出したり質問をしたりするのは先生から生徒や学生へであり、上司から部下へである。そしてそれに答えるとき、模範回答は質問者の方の手の内にあり、それから外れると恥をかく仕組みになっているから、ハイ、ハイと勇ましく手を挙げるのは小学生のすることで大人のすることではない。ましてこちらから質問したりする大それたことなどは無暗にすることではない。大学の講義が教授の学生への質疑応答や相互の討論に終始したり、他人とは異なる意見を述べることによって会議への貢献が果されるとするような生活習慣はわれわれの身にはついていない。大切な意思決定については、上長がそれをうまく決定しうるように寄り合って醸し出し、下は上に従い、小は大に和するというのがわれわれの意思決定のシステムのようである。

わが国の国会は、ヨーロッパをモデルにして導入されたものであるなら、それはやはり身分議会の伝統をひくものであろう。だがわれわれの国は身分の大分割、横断的分断を顕わにすることなく、小から大へと相対的存立と包摂の社会システムのもとにある。したがって、もっとも強大な政党は、政党という名を稱えながらも実は政党をなしてはいない。何しろ党员によってではなく成り立つ政党が存在し、その政党によって「民主的」に議会は運営されている。ここでは相互の対立が尊重されることなど望み難く、大が小を包摂することを以て「民主的」とされ、デモスのクラトスなどは何処にも見出し難く踏みにじられている。大和システムのもとでの民主的システムの導入が、いかに「民主的」成果をもたらしているかは、国会の議事の模様をみれば明らかである。そして、より生活に近く、より身近かな意思決定のあり方は、会社における株主総会にそのモデルをみることができる。

総会屋を駆使して、株主総会を無事切り抜けることに狂奔しなければならない様な企業が、会社の経営管理に優れ、高い業績を挙げていることは不思議であるが、このような在り方がどの企業にも当然のこととして恒常化していることに、企業内外から積極的抗議の生じぬことも、われわれはまた不思議とし

なければなるまい。

和を以て貴しとし、同心力を合わせることは、われわれが古くより継承した伝統的美徳である。同質人が相互に思いやって暮し万般をかばい合い、喜びと悲しみを共にして結び合うことが善であること、昔も今も変わらない。だがそこに個が分化自立し、個々の対立を保ちながらの共存を目指すグループが生じ、グループの対立のもとでの連帯が生じることを、禁忌されることはあるまい。

個々を生かすための組織が、いつしかに小の虫を殺して大の虫を生かす手段となるとき、大は小を包んで、大と小とは対立することのない同心円となり、そこでは融通無碍な“内と外”なる場におきかえられてしまう。自他に境を引き、対立のなかに相互の権威を認め合うことの未成熟な組織に、直截に民主主義の諸方策が導入されることを以って、組織の民主的運営は可能なのであろうか。共和と大和、それと民主とのからみ合い、何時か一度ゆっくり考えてみることをしてみたい。

3. システムとパック

フランス人が食いしん坊であり、またなかなかの食通であることは自他共に認められるところである。しかし、フランス人からみれば、何処にいてもひっきりなしに食べることを欠かさないのは日本人である、という。「日本の人々は、フランス人がグルメの頂点に立つ人種だと思っているが、どうして、日本人こそグルメである。彼等の食欲を知るためには、列車に乗るか、歌舞伎座に行くかすれば、明らかである。彼らはそうした場所で、ひたすら食べる。ハンバーグ・ライスや幕の内弁当がうまいかまずいかはさておき、とにかく食べる。目的が旅だろうと、観劇だろうと、彼らにとっては問題ではない。食べて飲んで、足もとに注意して土産を買ってゆうゆうと帰る。」²⁾と、その所以が指摘される。

食いしん坊であり得ることは、その国の文化の高さを示すものであると気を

2) ポール・ボネ『不思議の国ニッポン』ダイヤモンド社、昭和50年、21～22ページ。

よくしていると、その後で食事内容の貪しさが衝かれ、画一化された食品、さらには日本独自のインスタント食品が現代日本人のセンスにピッタリ適合しているのではないかと皮肉られ、同時に深く心配されて、次のように心からなる警告が発せられる。

「日本のつぎの世代は、もう物の味がわからなくなってしまうかも知れない。しかし、それよりも恐ろしいと思われるのは、母親からインスタント食品を与えられた子供たちは、食事の味の中に母親の愛情を見いださなくなるということだ。³⁾」「便利というのはありがたいものである。だが同時に、便利というのは恐ろしいものである。日本人が近代化の過程において、この“便利”という両刃の剣をどのように扱って行くかは、私たちヨーロッパの人間にとって興味の尽きないところである。ただ、私たちはあくまで三日三晩煮込んだシチューを食べて行くだらう。それも、各家庭それぞれの方式によって、個性的な味を持ったシチューでなければなるまい。⁴⁾」

やはり食事は文化を表わしている。言われる通り日本人は、しょっちゅう食べることに忙がしく、食いしん坊の様でありながら、ゆっくり腰を据えて料理の味を味わうには程遠い食べ方をしている。貧弱かつ画一的な食事をそそくさと済ますのである。

フランスでは、昼食に一寸うどん一杯というわけには行かない。パリに赴任して間もない日本の商社支社長は、目下の最大のなやみは、昼の食事に時間がかかりすぎることである。と、こぼしていた。

うどん、そば、すし、ラーメン、焼き飯、カレーライス、カツ丼などと、日本人は短時間にさっと食べられて、それなりに美味しい軽便食を作り出すことの天才である。一切合財を丼や皿に盛り込んでしまい、或はお膳の上に一挙に並べあげてしまう、パック作りの腕は独特である。だが、時間の経過をも伴侶とし、料理と酒と談論をゆっくりと楽しむことを、家庭の中に日常化するというのは未だしである。

3) ポール・ボネ、前掲書、139ページ。

4) ポール・ボネ、前掲書、140ページ。

フランスの会話学校で、食事のとり方についてのやりとりを教えられたとき、めいめいがメニューをみて自分の注文を“組立てる”ことを練習させられた。そのとき、「どうか組立てて (composer) 下さい」と言われた印象は強烈であった。

この年齢になるまで、永い間食事をしてきているが、自分で食事を組立てるという思いは全く持ったことがなかった。自分の選択によって注文するという、ただそれだけでなく、それは自分の好みを組立てるべきものであった。われわれは外で食事をするにも、各自が手間暇かけて献立表をゆっくり吟味し自分の好みに構成するなどの作業には馴染みがうすい。特にひとと一諸であると間がもたない。店の方で、予算に併わせて適当に見つくり、よきに計らってもらふことを佳しとするし、その事を先刻御承知の店の方では、選択し易いようにいくつかの定食料理というのが用意されている。旅館の食事は、旅館でみつくり出して出すことが当然であり、客はそのことを便利であるとしている。われわれは受身の便利さにとっぷりと浸って、それを至上のものとしていた。

自主的に組立てることを、合理的で都合のよいものだと感じたのは、フランスの散髪屋においてであった。フランスの散髪代はとても高いから、髪を刈るだけにしてもらうのが得策だ。と、いうのが、先輩海外出張者や旅行案内書の教えであったし、たしかにその通りであった。

だから、はじめは髪を刈るだけにし、短い髪の毛が首から身体の中にいっぱい入って、ちかちかするのを我慢しながら大いそぎで宿舎に帰りシャワーを浴びることにしていた。だが考えてみれば、散髪屋のやり方も食事の仕方と同じことになっているのだ。そういえば、散髪屋でも細かく単位作業毎に値段を書いたメニューがちゃんと張り出してある。自分の好きなように、散髪とか、ひげ剃り、洗髪、などを組み合わせればよいわけである。その一つ一つに値段はちゃんとはっきりしているから、組み合わせによって合計のいくらになるかは明らかである。散髪と洗髪だけなら、チップを入れて10フラン (650円) もあれば足りる。以来、髪の毛を身体中につけて、ちかちかを我慢することは止め、散髪と一諸に洗髪だけはしてもらうことにした。

高いといわれた散髪代も、やり様によっては日本よりうんと安くなり、今ではフランスの方式をなつかしんでいる。日本では、一寸刈るだけというわけにはゆかず、椅子に座われれば散髪一式をやってもらうのが通例であり、一式やってもらう方が割安になっている。だから、ひと時を散髪屋のなすに委せて、あれこれと思いわずらうことなく、なされるままに調髪される楽しみを満喫することにしなければならない。

どうやら、お仕着せの下に安住することは、われわれの得意とするところで、一定の大枠をきめておき、その中で各自が個々に好みを生かし、自主的判断によって自分の好きな構成を作るなどという面倒は、極力避けることを日頃からしつけられているようである。

組み合わせ、構成を楽しみにするということからすれば、フランス人の服飾に対する心遣いにも敬意を表しておかねばならない。町で会ったスタイルのよいフランス婦人のスカート、ごく近い距離でみると、裾の折り返しの縫目が間隔大きくぶつぶつと縫ってあるのがよく見える。その人だけかと思うとそうではなく、多くの婦人のスカートがそうしてある。随分不器用なものだが、まああれで必要かつ十分のことよなどと思っていた。

ところがこのこと、フランス婦人の並々ならぬお洒落の結果よりするものであることをそのうちに知って恐れ入った。犬養道子さんは、このことを以てフランス女のおしゃれを第一級のものとする。

「では何が一級のキメ手なのか。まず第一。フランスで洗濯に出すときは、多くの場合スカートやパンタロンのヘムをほどいた状態で出すのが常識でありうっかり忘れると、洗濯屋の方で、とくにパンタロンのヘムをほどいてかえして来ることが屢々ある。

いや洗濯などといわなくても、あるパリジャンヌの話によると、パンタロンやスカートのヘムは、二日や三日に一度、ほどいてしまうのが常識ということだ。

つまり、その日はいてゆく靴のかかとの高さによって、あるいは、その日の行く先や、他のものたとえばブラウスとの『色のわりあい』によって、スカートやパンタロンの長さがきまるのだから、いつも同じ丈というのは困る、のである。

私の友人のひとりに、未亡人で三人の幼子をかかえ、朝九時の出勤の前に三人を食べさせ保育所につれてゆくという、大多忙の人がいる。この彼女が、夜の、寝る前にパンタロンのヘムをほどいて、ブラシをかけアイロンをかけるのである。

そして朝、『ほんの三分』をかけてパンタロンのヘムを、その日の靴にあわせて縫う。

靴はちょっとでもチビて来れば、出勤の途中で靴なおしに持ってゆく。

おしゃれのベストドレッサーの日本人女性のだれが、そういうことをするであろうか。日本人のいうおしゃれのベストドレッサーとは、要するに金があって、流行の『ことしのモード』をつねに買うだけのゆとりがあって、その上、『古くなったのは使いすて』とやらの消費主義におどらされることを意味するものである。とりかえひきかえ、いつもモードを追っていけば、その人はドレッサーということになる。

が、パリ女のおしゃれは、手持のものを、自分にあわせて大切に、手間を惜しまず手間をかけて着る、ことを第一とするのである。⁵⁾」

スカートの縫目の荒さは、スカートの長さを能率よく調整し、毎日の自分にあわせるフランス女の心意気のなせるところであった。こういうことから、フランス人のおしゃれを見直せば、暑さ寒さだけではないまわりの四季の自然の変化に心を使い、同じような型や色の服を着ながら、それぞれに自分の持味を見事に出している。暖色とか寒色とかいうことも、ここでは庶民の日常の生活のなかに生きているようであり、アクセサリーがアクセサリーであることを知らされた。ひょっとすると、われわれは、システムということの本当の意味を知ることなしに、やみくもとんでもないことをしているのではないかと気になりだした。

全体運営のルールがあり、各自が自分の受持ちを分担しながら連携して行動する在り方は、スポーツなどをみても西洋に優位に発展しているようである。

5) 犬養道子『セーヌ左岸で』中央公論社、昭和50年、68～69ページ。

スポーツについては、戦時中の学生時代の小事件が次のように思い出される。

休講の時間を校庭にたむろして駄喋っていたわれわれ学生のところ、教練の教官がやって来て、「こうもり傘を逆かさに振り廻すような運動（ホッケーのこと）は止めて、柔道、剣道、銃剣道だけをやってはどうかね。」と、言い出した。そこで自然と西洋のスポーツと日本伝来のそれを比較しての論戦が生じることになったが、そのとき、学生たちは、西洋のスポーツは集団で行う競技のルールがちゃんとしており、ちがう役割を分担しながらのチームプレイがありチームワークがあることを主張した。結局、教官は、西洋スポーツの長所について深く首肯することとなり、以後西洋スポーツ排撃論を口にするとはなかった。

われわれは集団を組み、一斉に一体となって行動することについては、他国の人びとに決して劣らないどころか、むしろ日本人の特長として高く評価されている。しかし、逆に、集まれば即ち一体になる、という以外の在り方には甚だお粗末であって、群を離れるととたんに右往左往して成すすべを知らなくなるといわれる。

こういう性質がうまく生かされるためか、海外旅行にはパック旅行というのが企画され、パックに入っての日本人の海外旅行は大盛況である。計画がきちんときまっていて、渡航手続きから、宿泊、食事の手配まで、参加者が個々には何にもしなくてよい。不精者には打ってつけであり、お年寄りのヨーロッパ旅行などには恰好のものだと思う。しかし、こういう、ぎっしりつまった計画を強制され、終始指揮者の指図通りについて廻るというやり方は、フランスでは成立しないであろう。

フランス人の外国旅行にパック旅行があるのかないのか、またどのように行われているのかは、知らないが、フランスに来る欧米の団体旅行については、次のように言われる。

「たとえばアメリカの団体客がチャーター機でオルリー空港に到着したとしよう。彼らは集合の日時を確認するや否や、おのがじし勝手な方向に散ってゆく。この陽気で気ままな旅人たちは二週間なり、三週間なり後の集合日の予定

の時刻にふたたびパリ空港に三々五々と姿を見せる。ひとりひとりの個人はそれぞれ自分なりの、自分の好き勝手なヨーロッパの旅を楽しんできたのである。彼らが団体を形成しチャーター機で乗りつけたのは、一にかかって旅費を割安にすますというその経済性にあった。したがって、この場合の団体は、きわめて色合いの違う個と個との任意の集団にすぎないのである。この場合、集団自体が個人を拘束するという面はほとんどない。⁶⁾」

フランス人は自分でやれることを、人からいちいち指図されるなどということには我慢がならないようである。日本人が手とり足とりの指導を受け容れて平気であることに、ポール・ボネ氏は次のような批判を浴びせる。

「日本は、英国と並んで、世界でも数少ない左側通行の国である。わがフランスは他のヨーロッパ諸国と同様に右側通行だから、日本にきた当初は多少まどついたものである。

しかし、これはなれてしまえばどうということもない。私が奇異に感じたのは、歩道のない狭い道における“人は右側、車は左側”というキマリであった。

いったい、こんなことを官憲が指示する国が他にあるだろうか。

たしかに狭い道を人が歩く際、この“対面交通”を実行すれば、安全度は高まるかもしれない。が、車の左側通行を規定するのは当然として、人間がどちら側を歩こうと、それは個人の勝手であって、あえて官憲が指示することはあるまい。⁷⁾」

「日本においては、市民の安全は全面的に警察にゆだねられ、子弟の教育は全面的に学校にゆだねられている。思考はテレビ・ラジオ・新聞にゆだねられている。自分で考え、自分の意志で行動し、わが身を自衛し、子弟を家庭においてきびしく教育するという考え方を持つ日本人はどうやらあまり多くないようだ。

そこで、官憲側も、市民の手とり足とり指導をすることに力を注ぎ、前記の“人は右側、車は左側”の指示になって現われる。⁸⁾」

6) 荒木博之『日本人の行動様式』講談社、昭和48年、15ページ。

7) ポール・ボネ、前掲書、130ページ。

8) ポール・ボネ、前掲書、131ページ。

こういう風にいわれてみると、われわれはまるで自分の足で立つことをしていないようである。というより、他人に自分のことをしてもらうことの方を好み、さらには寄生とたかりを“得”なことで、それにあぶれると腹が立ったりしょんぼりしてしまったりしている。誰しもが拠り所にして、自分自身で行動し、同時にそのところが犯されることを是が非でも守ろうというようなものを持っていない。その点で「開発」にはまことに都合のよい柔軟性を持っている。つまりソフト・ステートたる社会基盤を持っているのだ。

だが開発ということ、生産においても生活においても、それが一定のシステムを成している以上、連関のなかで然るべく調整規制されなければならない、そのことは日常の生活感情に反射して、こののところはどうしてもこうしてもらわなくてはならないとするものが人びとの間になくてはならない。自分の思いを込めての暮らしが大切にされないところでは「開発」はとんでもないことになる。

自分たちの大切な生活環境を破壊して、省みることのない日本人に、フランス人の目は冷たい。

「自分の国を心から愛しながら、日本人は国土の保全に対してはほとんど何もせず、近代化ないし利潤を高めることができさえすればどのようなひどさも諦めて受容する（風光明媚の地の只中にそびえる俗悪なホテルや工場、まがいものの城塞、奈良のディズニー・ランド、不調和な広告、史跡をとりまく営利目当の建造物）。彼らは何ほどかの名所や旧跡が残っていることを慰めとしているが、その伝統や美のオアシス、観光のオアシスも多くは醜い工業地帯に囲まれている。景勝地の保護はまるきりないに等しい。工場や建物の進出はオスマン的⁹⁾心遣いよりも投機によって支配され、統制がとれていないようだ。地方自治体は都市計画を優先させようとはしない。史跡の保護はだいたい目も当てられない刷新を伴い（京都の知恩院、鎌倉の大仏）、大衆の傍若無人な商業施設を制限することもできずにいる。¹⁰⁾」

9) 19世紀フランスのセーヌ県知事で都市計画に基づき、パリの町の道路、公園などを整備拡大して、現在の整然とした都市の基盤を作り上げた。（林瑞枝訳注）

10) ピエール・ランデイ著、林瑞枝訳『ニッポン人の生活』白水社、昭和50年、21ページ。

80年余り前の1889年に建てられたエッフェル塔と、現在それを中心とするその付近の雄大な景観をみて、人工とはこういうことであったのかと感心させられた。そこにはエッフェル塔がぼつんと立っているだけではなかった。エッフェル塔はパリに息づいて立っているのであった。

4. おわりに

われわれの国は、非西欧国のなかで逸早く「近代化」を遂げ、「高度経済成長」を果したとするのであるが、どうもこれ迄営々と築き上げ継承した、独自のよさもある伝統社会を、滅多やたらと打ち砕くことに急であって、したがってまた「近代化」による異質の導入も、必ずしも、いわれる程にわれわれの日常生活を豊かにするものにはなっていないのではないかと心配がしきりである。

激動のなかにあって、なお且つ、わが国よりはゆるやかな歩みにあると考えられるフランスは、そういうわけで行ってみたい国であり、これからも機会があれば何回も行ってみて、そこでの暮しと仕事の仕方をみてみたいと思っている。

フランスにはやはり、わが国の「近代化」において導入することが忘れられているものが何となくあるように見える。

宗教と階級については、ヨーロッパを訪れた日本人の誰もがその存在をひしひしと感じるということであるが、私もまた同様であった。私はまた、そういう身分・階級を前提にして、個人と連帯ということを強く考えさせられた。それは文献により、あるいはフランス人の口から直接に教えられたというよりも一層に、何とはなくの日常生活のなかでの感得としてである。フランスの社会と日本の社会は、当り前のことであるが、肝心なところで社会システムを異にしていると思える。

フランスでぼんやりと過すことをして見て、日本の近代化はただひたすらに「日本的近代化」として成功しているのだ、ということに思い当った。

われわれの社会は、ついこの間まで、広範な地域にまたがる「国家」を形成

していなかった。そこでの、個々に独立性をもった小さな組織は、支配に対してそれをチェックするヒドバック装置をもたないまま、思いやりと我慢を重ねることで何とかやってきていたのだ。そして、ようやく民衆が自分の働きを自分のものとするためにどうすればよいかに目覚めはじめたところであった。ところがそれに対してこの百年、「近代化」として果したことは、そこに自生しようとする個人の自立を妨げ、支配に対抗する連帯の圧殺をこととする「国家」作りにあった。自治体や企業も結局この枠内に形成され、あるいは包摂されての存在であった。

ロッキード汚職はまさにそれを象徴する。ポール・ボネ氏は言う。「私は日本におけるロッキード事件のテレビ国会中継を見た。日本における近代資本主義——ことに第二次大戦後の——成功の秘密は、この神に対する忠誠心としての個人主義の“まっ殺”にあるのだということを私はつくづくと思い知らされたのである。¹¹⁾」

われわれは、それなくてはわれわれが存在し得ない共同体のこと、その共同体を正常に維持するためのゲノッセンシャフトのこと、その根源たる自立個人の行動基盤のこと、大きく民衆の課題として考えねばならない。

最後に、玉野井教授の「ヘルシャフトとゲノッセンシャフト」中の一文をかかげて、この覚書をおわりにする。

「ゲノッセンシャフトとは、ヘルシャフトに対抗する形をとりつつ、成員の意識で横に結ばれる多様な団体形成を総称するものといってよいだろう。重要な点はこのゲノッセンシャフトが12, 3世紀以来の西ヨーロッパ社会に特有な組織原理としてあらわれていることである。私は、この事実のもつ意味を早くから強調しておられる増田四郎教授の次のことばに注目したい。『西ヨーロッパの社会生活にあたっては、上からの何らかの〈支配〉に対しては、つねに横の〈団結〉の力がうまれ、両者の押し合いの間から、いわばその接点ともいうべきかたちで、慣習・申し合せ・条令その他広義の〈法〉や〈制度〉が、

1) ポール・ボネ、『続・不思議の国ニッポン』ダイヤモンド社、昭和51年、121ページ。

客観的かつ持続的に形成される，という特性である。いいかえれば，上からの権力が，一方的かつ無制限に滲透して，個人をも直接に把握するといった支配の貫徹は，中世を通じて，そしておそらく近世に入っても，不可能にちかかったということである。¹²⁾ ¹³⁾」

12) 増田四郎『西洋中世社会史研究』岩波書店，昭和49年，387ページ。

13) 玉野井芳郎「ヘルシャフトとゲノッセンシャフトー〈組織〉原理に関する方法上の覚書一」『組織科学』第9巻第4号，丸善，9ページ。